

平成15年度入学者の2回生進級時

アンケート報告書

高等教育研究開発推進機構

平成15年度入学者の2回生進級時アンケート報告書

目 次

. 調査の概要	1
. まとめ	2
副機構長 林 哲介	
. アンケート回答	
1. 総合人間学部	10
2. 文学部	10
3. 教育学部	12
4. 法学部	13
5. 経済学部	14
6. 理学部	15
7. 医学部	17
8. 薬学部	18
9. 工学部	18
10. 農学部	24
11. 学部名未記入	25

．調査の概要

1．質問事項

あなたは、1年間全学共通科目を受講して、どんなことを感じ、どんなことを考えましたか。自由にお書きください。

2．実施方法

平成15年4月2日～4日の3日間に、高等教育研究開発推進機構が実施した全学共通教育にかかる「新入生ガイダンス」の際に記名式のアンケート調査を行い、約2,680名の提出があった。このアンケートは2回生進級時に各自に返却することとしていたので、平成16年4月の成績表交付時に、全員分を個別に封入し、新たに「新2回生アンケート」を同封のうえ配付した。

アンケートの回収は、共通教育教務掛のレポートボックスに専用ポストに投函してもらった形で実施し、提出者総数は110名であった。(内訳は下記のとおり)

総合人間学部----- 6名

文 学 部-----17名

教 育 学 部-----5名

法 学 部-----14名

経 済 学 部-----10名

理 学 部-----8名

医 学 部-----2名

薬 学 部-----1名

工 学 部-----35名

地球工学科--6名、物理工学科--14名、電気電子工学科--4名

情報学科--4名、工業化学科--7名

農 学 部-----11名

資源生物科学科--3名、応用生命科学科--2名、食料・環境経済学科--2名、

森林科学科--4名

学部名未記入-----1名

ま と め

高等教育研究開発推進機構

副機構長 林 哲介

高等教育研究開発推進機構が発足した直後の平成 15 年 4 月 2 日～ 4 日の 3 日間に、本学で初めて全学共通教育に関する新生ガイダンスを実施したが、その際、新生の皆さんには、入学にあたっての抱負とガイダンスを受けてのこれからの期待などを自由に記してもらったアンケートを実施した。その内容はすでに冊子として纏められており、また機構のホームページに掲載されている。

このアンケートは後日各自にお返しすることにしていたので、1年後の成績交付時に皆さんに返却するとともに、1年間の全学共通科目を中心にした学習を振り返って、どんなことを感じあるいは考えたか、改めて自由に述べてもらうアンケートをお願いした。残念ながら、このアンケートに応えてくれた方々は 110 名と多くはなかったが、1年間の学習に対する率直な感想、カリキュラムや授業に対する評価や注文など、極めて有益で、とりわけ授業を担当している教員にとって貴重な意見をいただいた。これを無駄にせず、これからの参考に供するために、また、断片的ではあっても全学共通教育を実施している側から皆さんへのお答えを含めて、まとめておくことにした。

まずはじめに、全学共通教育の意義を捉え、充実した1年間であったことを積極的に述べているものや、1年間での変化を感じている正直な気持ちなどを紹介しておこう。

大学に入ってからすぐの頃は、自分のやりたいことが少しも決まっておらず、また「学」と聞いてもどんなことをする学問なのかよくわからなくて、授業内容についてのイメージが漠然としていた。しかし、1年間いろいろと全学共通科目を受講してみても、大学でやっていることが具体的につかめてきたし、自分が学んでみたいものの方向性が見えてきた。2回生からは専門科目も履修できるようになるが、その選択にも、全学共通科目を受講したことが役立っている。高校の時に全く無かった学問の入門や基礎的なことを知るためのものとして、全学共通科目は重要だと思う。

一般教養と言われますが、文系、理系どの分野にも私がある一端しか知らない大きな世界が広がっていることを実感し、その世界に少しでも触れられたことは大きな収穫です。

それぞれの講義を担当される教員方が、それぞれに自分の研究する学問に関して熱意や愛着を持っておられた。それに影響され、かなり短い間であったが、授業に関連

するさまざまな本を読み、物の見方がかなり広がったと思う。全学共通科目は、自分で自由に受講する科目を選ぶことが出来る。そのためどの講義に対しても興味を持って、意欲的に受講することができた。自分にとって有意義なものであった。

「新入生アンケート」を読み返してみて、入学したばかりの頃は、向上心でいっぱいだったのだなと思いました。現在も、勿論向上心はあるつもりですが、当時ほどはなくなっていることに気づかされました。もう一度初心に戻って頑張りたいです。

新1年生と会うと全く違う生き物であることに驚く。共通科目によって少なからず肥やしを得ているのではないかと思ひ当たる。

全般的に、全学共通科目の中でも、A群科目を評価する声が目立った。

A群は自分の興味のあるものを取り、教養を広げようと思って取ってみるとやはりなかなか面白かった。

A群は、その幅の広さと、講師、教員の方の専門について語っていただけるという恵まれた環境が大変意義深いものがあつた。単位認定されなくても、今年もA群取ります。大変楽しみにしていますので、全学共通科目の更なる充実をお願いします。

満足している。もともと期待が薄かったという理由もあるが、そうでなくても一部の授業にはさまざまなことを考えさせられ、自分を培うのに一役買っていると信ずる。教員の10人に8人は学生に教える気があまりないが、2人は非常に面白い授業を披露してくれる。いわゆるA群にそのような講義が多い。

A群科目をはじめとして、本学の教養教育は、多様な科目を提供し、これを学生諸君の自由な選択に委ねているところに大きな特徴がある。そのために多くの様々な科目をできるだけ学生諸君の選択が可能なように時間割の随所にちりばめてある。このようなシステムをとっている大学は今や数少ない。

少ない教員で効率よくやろうとすると、学生諸君には“定食メニュー”を食べさせていただくことになってしまう。そうならないように、人間・環境学研究科をはじめ多くの教員の努力があり、これを評価してくれるのはうれしい。

広く自由に自分が興味ある講義を選べるのでとても良かった。

全学共通科目は面白い。いろいろな分野のことを、少しかじることができ、こんな学問があつたのか！と世界が少し広がる気がする。

講義には講義に聞きたい学生しか来ないというのも非常に喜ばしい。他の大学の先生方の話を聞くと、学生が講義中に喋る、飲食するというのは日常のことらしい。うちの大学では、そのような学生はそもそも講義に来ないので（出席点がないので）とても良い。

ガイダンスの際に、「1週間の時間割を目一杯埋める傾向があるが、これは実際にはとても消化できるものではない」ことを指摘しておいたが、どうも、早く必要単位を揃えておくという風潮が上回生から吹き込まれているらしい。その反省を書いてくれた方も多くいた。

1回生は単位のこともあるので、週に20コマ程度のクラスを履修していましたが、そうするとやらなければいけないことがあまりにも多すぎて、全て中途半端になってしまったような気がします。

とにかく早く単位をそろえたかったので、簡単だと噂される科目を多く登録したが、やはり興味はあまりなく面白くなかった。やはり自分の興味のある分野(歴史・文学)の方は面白く、試験の結果も良かったので、授業は自分の関心で選ぶべきだと思った。

法学部は1回生で単位をそろえないとまずいと言われたためゆとりがなかった。

「1回生のうちに必要なA群の単位は取ってしまおう。」という周りの空気に押され、空いているコマは、A群で埋めるようにした。1回生のときに無理矢理授業を入れるのではなく、自分が本当に面白そうだと感じるものだけ選べばよかったと少々後悔している。

1年間にどれぐらいの科目(単位)を履修するのが適切か、ということについては、最近いろいろ議論がある。「単位の実質化」という課題として言われている。「大学設置基準」によれば、1単位は45時間の学習時間を標準としている。実際には、講義科目の場合1週1コマを2時間としても(本当は90分)半期13週、26時間で2単位である。建前とは大変な違いである。このままでは米国の大学などと比べると日本の大学の単位がとてもいい加減な内容になるので、是正すべきだという声が次第に大きくなってきている。いきなりそのレベルにまではギャップがありすぎるが、せめて2単位の科目が、講義時間とそれに見合う程度の予習・復習を含むような内実のあるものにしていくことは必要だ。そこから、「履修登録科目数の上限設定」を行うべきであるという意見が出てくる。すでに大学によっては制度として取り入れているところもある。あるいは、「多様な科目の自由選択」を止めて“定食メニュー”のカリキュラムにすれば、自動的に履修できる科目数は制限できる。しかし、京都大学では「多様な科目の自由選択」を大切にしたいし、「上限設定」の制度化も好まない。それだけに、せっかく提供されている内容豊かな科目を学生諸君が消化し、血・肉にしていくように、学生諸君自身による自覚的なカリキュラム・時間割設計を期待しているのである。ただ、このことをもっ

ら学生諸君に期待し、その責任にするのは片手落ちである。1回生のうちに全学共通科目の単位ぐらいは全部揃えるのが当たり前、というような風潮があるのは、多くの科目を登録しても、そこそこ単位が揃ってしまうほどに、多くの科目の単位取得が容易であることから生じている。次にたくさんの批判意見を紹介するように、「楽勝科目」とよばれるような科目が大手を振っているようでは、いい加減な大学教育という批判には耐えられない。すべての科目で、学生諸君と教員が真剣勝負で付き合うことによって初めて本学の教養教育を誇ることができる。このことはまずなによりも教員が受け止めなければならない課題である。また、成績評価の甘さに対する学生諸君からの批判はかなりある。

高校まででは得られなかった内容を学ぶことが出来て満足している反面、試験での点の甘さに入試とのギャップを覚えて不思議な感じがしました。

全学共通科目は卒業するために絶対必要だから、どうしても決められた単位を取らねばならず、私は結局「楽勝科目」ばかりを選ぶ結果になった。

俗に言う「楽勝科目」は全面的に撤廃すべきである。まともな授業を受けている者が馬鹿を見るような講義は開講する必要なし。出席重視にもかかわらず代返行為及び出席確認時のみ居合わせて授業には参加しない行為を黙認するような講義は、少なくとも評価方法を改めるべき。「レポート課題提出」にしても、何処ぞのHPからのcopy & paste および他人のレポートを転写したもので、済ませたレポートに単位を与えているようでは考えない大学生を増やすだけである。

レポートさえ出せば、最後の試験さえ受ければ、単位が取れるような、学校へ行かなくてもいいような科目を減らして、生徒の積極性を引き出せるような、インターアクティブな授業を展開してもらいたいと思います。

全学共通科目の試験の採点は甘すぎるのではと正直思った。

このような批判をうける実情を反映しているのであろう。学生諸君の中にも問題はあ

思ったより簡単に単位が取れる。特にA群では授業に出席しなくても、レポートを書けばとおるものもあり、軽視されがち。

理系の学生のA群に対するやる気のなさに驚く。「単位が楽に取れそうなA群で時間割を埋めて授業には全く出ず、試験だけ受けて通れば儲け物」といった風潮がある。

「授業に出ないで、単位を取るのがベスト」という考え方が横行している。

さて、個々の教員の授業の仕方や態度などについて、いろいろ批判をいただいている。これらのご意見をそれぞれの教員に確実に届けることから始めなければならない。今その方法を検討している。

今日はなにをどう話すかをほとんど考えてきていないのではないかと思わせるような独り言のような講義があったのが気になった。

他大学、研究所の講師は授業にもよるが、学生のレベルを考慮せずに専門的な話をする傾向が強かった。

講義の質が教員の授業のうまさに左右されている。どんなに興味深そうな内容をやっている、教員がダメだったらちっとも面白くない。全体的に講義の質が低いと思う。

教員によって授業に対する熱意に差があったように感じられた。A群はそうでもないが、B群はわりと適当にやる教員がいる。

ただひたすら板書しているだけで、説明も少ししかしない教員には正直腹が立った。もう少し教員に指導して、生徒の理解度がメインになるような授業をしてほしい。(特にB群) 授業進度をメインにする教員が多いと思う。

京大が看板にしている「授業における会話性」が見事になかった。あったのは「教授と黒板の会話」だけ。学生の理解度を確かめながら進めるべき。研究者である一方教育者でもあるから、学生ほったらかして給料だけもらてたらあかん。

教える立場として限られた時間の中でいかに一つ一つの学問分野を紹介するか。いかに質の高い「きっかけ」を提供するかもっと創意工夫と熱意がほしい。高い授業料を払ってくれている親に申し訳ない。

教員の質をもう少し考えてもらいたい。不満に思ったのは休講の多さ、講義を楽しむに来る生徒をなんだと思っているのか? 非常に教員の意識に疑問に思った。

語学(特に英語)の難しさ、楽しさに差がありすぎる。数学も教員によって大幅な差がある。クラス指定で授業を行うならもっと質の高い授業をすべきである。

教授によって同じ名前の授業でも、内容、難易度が異なっている。クラス指定など自分で選べない科目がクラスによって教授が違い単位の取りやすさ等がかわって来るのは不公平だと思う。

そのほかに、いろいろの要望意見をいただいている。

科目によっては、毎回沢山の受講者が集まり、座る場所が足りないということがあります。受講制限をするなどして、全員がいすに座って受けられるようにしたい

と思います。

毎年、少しずつは改善されているが、自由選択のため十分には予測できない事態が部分的に起こる。

理系科目は文系用、理系用があったのに対し、文系科目はそれがなかったのが残念。文系科目も理系用のものを作った方がいい。

文系向けの理系科目をもっと増やしてほしい。薬学とか。

A群の必要単位及び卒業認定単位を増やすこと。(理系の学部)同じように文系の学部のB群もすること。

文系向けの理科科目をもっと増やす必要があることは、機構でも重要な課題として認識している。少しずつ改善していく予定である。教養教育としての単位を増やすべき、という意見には元気づけられる。

もっと教員との交流も深めたいと思っている。自分から積極的に研究室などを訪問したらよいとよく言われる(ほとんどの先生は歓迎してくれるらしいのだが)。しかし、先生のお仕事の邪魔にならないか、もしくはその先生があまり学生の世話をするのが好きでない人だったらどうしようか、という不安が常につきまとう。もし出来れば“この先生はどの時間帯ならば訪問してもよい”“このアドレスは学内の者のアポ専用アドレスです”というような学生と教員をつなぐシステムがあるとなお良いと思われた。

教員が“オフィスアワー”を設けて学生諸君にわかりやすくしている例はまだ少ない。今年度、高等教育研究開発推進センターでは学生諸君と一緒に「学生・教員教育交流会」という活動を始めた。これから恒常的に、学生・教員双方で京大の教育のあるべき方向について議論・研究していこうという“半官半民”の取り組みである。そのワーキング・グループの一つが教員のオフィスアワー情報をWebで公開する準備を進めている。この交流会の活動に多くの学生諸君が参加してくれることを期待したい。

クラス指定だけで、とても自由に学べるとは言い難いと思った。工学部はB群科目が指定されており、単位が認められないB群科目まで手が回らないため、実質的に選択の幅が制限されているということである。これでは教養教育というのも有名無実だ。

理系学部では1年次からクラス指定科目が過密で、科目選択の自由度が著しく制限されている現状については、かねてから問題を感じているが、まだ残念ながらそれぞれの学部での検討が進んでいない。4年間のカリキュラム課程の設計の問題であり、諸君の声が各学部にも聞こえ、検討が進む必要がある。

ポケット・ゼミを後期も開講してほしかった。

これも要望の多い意見であり、検討中の課題である。
最後に、外国語についてもたくさんの意見があった。日本の大学における外国語教育のありかたについては、さまざまに議論のある問題であり、またそれぞれの大学で変化していつている。一般的には初修外国語の必要単位を減らしたり、選択制にする大学や、英語については会話を中心にした実用的技術を強化する方向が強まっている。しかし本学の現状では、教養教育としての初修外国語の重要性を強調し、また英語については“English for academic purposes”を基本としている。その上で、担当教員グループによってクラスの充実を図る方途の検討が続けられている。外国語の学習成果は、方法の選び方によって一挙に上がるものではない。それだけにさまざまな努力が目立たない面がある。諸君の意見は担当教員グループの検討の重要な資料となる。

さまざまな教養科目に接することが出来、なかなか面白かった。特に入学時に考えて取った語学（ロシア語）は、奥が深く難しかったけれど、1年間でとても親しみの持てる言語として感じる事が出来ている。

語学の授業は特に冗長に感じた。英語は高校の授業の延長のようで、聞いていて何が得られる訳でもない。一方の初修外国語は教員の一方通行の授業であり、受講者の大半が眠っていた。結果的に語学力がついたのかと言われたら間違いなく「否」である。クラス選択権のない1回生は悲惨だと思う。京大における外国語教育の改善は急務ではないだろうか。

英語は各クラスで内容に差があるので、これをクラス指定にするのは無理があると思う。

Ｃ群ではもっと「使える語学」を教えてほしい。

もっとリスニング、スピーキングなどの技術を向上させることを中心に授業を進めてほしかった。

率直に言って、大学における英語教育は選択制にすべきである。日本語による論理的な会話能力が欠如した若者が増加する現在、全ての大学において英語教育を強制的に実施する意味は薄れてきているといえる。大学における英語教育は選択制にすべきだと前述したが、これは大学入試についても当てはまる。近頃世間は小学校からの英語教育に傾斜しているが、こんなことは言語道断だと思う。世間の親御さん方が小学校からの英語教育実施を強く要望する背景には、日本が国際社会の一員として不可欠という現状が垣間見えるが、日本のほとんどの大学が、大学入試の際に英語を必須科目として課している現状も看過できない。すなわち私は大学入試で英語を課することが遠因となり、小学校からの英語教育への傾斜が強まっていると考える。第二に、1回生のときに第二外国語を必修科目として学習させるのは百害あって一利なしと言えよう。そもそも日本語もままならない学生に英語を課し、その上第二外国語として、仏語、独語、伊語、中国語、露語、アラビア語などのうちから一つを課するのは本末転倒である。いかに本末転倒であるかは、不肖私が所属する工学部工業化学科の第二外国語履修状況を見てもらえば明白である。工業化学科では、1回生のときに、第二外国語を4単位（通年）取得すれば、2回生からは学習する必要がなくなるのだが、逆に2回生終了段階で、第二外国語の単位を4単位取得できていないと、3回生に進級することはできないのである。そこで私も含めて工業化学科の学生諸君は、授業開始当初は、単位取得のため、必死で勉強しようとするのだが、時間が経つにつれて、心の中で「どうせ単位のための勉強。60点以上取ればいいんだ。」という意識が働き、学習意欲が削がれてしまうのである。3回生に進級するためには、間違っても落とせない。第二外国語であると同時に、実質的には「単位取得のための勉強」と化し、形骸化してしまった第二外国語。そうしたジレンマに陥り、苦悶する学生が増加の一途をたどり、その結果カンニングという一見道徳に反した行動ではあるが、実質はいき場のない学習の自衛的行為に発展するのである。このように第二外国語教育の必修は悪循環しか生まないのであり、前述のように有害無益なのである。私は、京都大学が英語も含めた外国語教育を見つめ直し、学生本位の教育となるよう改善し、全国の国公立大学の草分けとなるよう切望する。

．アンケート回答

最後に、回答のあったものを学部順に紹介するが、回答をそのまま転載することはしていない。各学部別回答は下記のとおり(〃：男子、 〃：女子を示す)

1．総合人間学部（提出者数 6）

授業にあまり興味が持てず、自分が何をしたいのかも掴みきれず無為に1年を過ごしてしまった。次は有意義な1年にしたい。

明らかに「落とした!!」と思っていた科目は、結果が納得できたのですが、「これは取れた」という手応えのあった科目を落としてしまいました。理由とか教えてほしいです。

語学について（特に英語）あまり身についたとは言えない。自分の日頃の努力が足りないこともあるが、もっとリスニング、スピーキングなどの技術を向上させることを中心に授業を進めてほしかった。他の科目については、主にB群科目ばかり取っていたが、正直自分の将来進む道に役立つとは思えない。（数学、理科など）もっと専門分野に近いものを多く取れば良かったと思う。クラス指定に流されてしまった。

大学に入ってからすぐの頃は、自分のやりたいことが少しも決まっておらず、また「学」と聞いてもどんなことをする学問なのかよくわからなくて、授業内容についてのイメージが漠然としていた。しかし、1年間いろいろと全学共通科目を受講してみて、大学でやっていることが具体的につかめてきたし、自分が学んでみたいものの方向性が見えてきた。2回生からは専門科目も履修できるようになるが、その選択にも、全学共通科目を受講したことが役立っている。高校の時に全く無かった学問の入門や基礎的なことを知るためのものとして、全学共通科目は重要だと思う。

たくさんの分野のさまざまなクラスがあり、何を勉強しようかわくわくしました。1回生は単位のこともあるので、週に20コマ程度のクラスを履修していましたが、そうするとやらなければいけないことがあまりにも多すぎて、全て中途半端になってしまったような気がします。それにどの科目も1週間に1コマしかないし、習ったことがあまり身につきません。1つの講義科目を週に少なくとも2、3コマ（それぞれ違う曜日）とした上で、必要単位数の調整することを提案します。その方がじっくり学べると思います。

別に何もなし。

2．文学部（提出者数 17）

視野と興味関心が広がった。

面白い授業もあったし、明らかに教授が全学共通科目を軽視しているものもあった。総合大学だからこそ、こんなにもさまざまな授業を出来るのだと思うし、それは魅力だった。

今日は何をどう話すかをほとんど考えてきていないのではないかと思わせるような

独り言のような講義があったのが気になった。終始同じ話題が発展することもなく持続し、こちらの興味がわからないような講義内容では、わざわざ授業料を払って大学まで出てきた甲斐がない。学生は一種の客である。教員はその点を忘却して、90分という貴重な時間を横領すべきではない。

- ・自分の興味ある分野が多少偏っているせいもあるが、いくつかの授業で異なった分野であるのにつながりが見いだせたときは知的なおもしろさを感じた。
- ・他大学、研究所の講師は授業にもよるが、学生のレベルを考慮せずに専門的な話をする傾向が強かった。

この一年全学共通科目を受講して多くのことを学びました。一般教養と言われますが、文系、理系どの分野にも私がその一端しか知らない大きな世界が広がっていることを実感し、その世界に少しでも触れられたことは大きな収穫です。これからその分野に興味を持ったとき、勉強するためのきっかけ導入として、これらで得た知識、考え方を大切にしていきます。

とにかく早く単位をそろえたかったので、簡単だと噂される科目を多く登録したが、やはり興味はあまりなく面白くなかった。やはり自分の興味のある分野(歴史・文学)の方は面白く、試験の結果も良かったので、授業は自分の関心で選ぶべきだと思った。

授業内容が幅広く、その中でも自分にとって興味のある授業を取ってみた。中にはあまり関心をかき立てられず、途中から授業に参加しなくなったものもあるが、だいたい授業で興味が更に増し、満足を得られた。

幅広く自由に自分が興味ある講義を選べるのでとても良かった。どんどんさまざまな範囲の講義を増やしてほしい。

学問の奥深さを垣間見た。世界はどうしようもなく広く莫大に見える知の営みも全てを覆いきれない。それでも人の好奇心を尽きることを知らず、新しい世界を切り開け続ける。新しい世界を見つけ出せる人になりたい。

全学共通科目は面白い。いろいろな分野のことを、少しかじることが出来、こんな学問があったのか！と世界が少し広がる気がする。ここで受けた授業がきっかけで関心を持ち、関連する本を読み始めた科目もある。高校の先生が、全学共通科目は自分の専門と全く異なるようなものを選んだ方が良いと言われていたが、本当にそのとおりだと思った。もっと取りたい科目もあったが、取りたいものがどうしても重なってしまったことが多かったのが非常に残念だった。

高校まででは得られなかった内容を学ぶことが出来て満足している反面、試験での点の甘さに入試とのギャップを覚えて不思議な感じがしました。学生側の受講態度も予想以上に甘くて、落ちてしまった同期に友人の学習意欲が勿体なく思えました。無造作に興味のある科目だけを選んで履修しましたが、いわゆるハズレがなく、講義内容はとても充実していました。

入学してすぐの時は、いろいろと興味深い授業があり、シラバスを見てわくわくしていたが、いざ学期が始まると興味深いものを全て取ることが出来ず残念だった。全学共通科目は卒業するために絶対必要だから、どうしても決められた単位を取らねばならず、私は結局「楽勝科目」ばかりを選ぶ結果になった。やはり専門科目を取るまでは、全学共通科目では本気で取り組もうという気になれなかった。しかし、私は必要最小限の科目しか登録せず、それに全力を注いだので、時間的にかなり余裕があり、

どれも良い成績を取ることが出来、その点では満足である。文系がB群を必ず取らなければならないというのは大変だったが、幅広い教養を身に付けるためにはやむを得ないことであると思っはいる。

大学は高校とは違うのだし、教える教員もそれぞれ研究の傍らで教えずにはいけないので、仕方のないことかもしれないが、概論的なものでなく、かなり専門的内容の講座がいくつかあった。いきなり専門に深く突っ込まれた授業を受けても興味はわからないものであると思う。やはり、全学共通科目というのは、入門的な易しい内容から入るべきと思う。内容を難しくしていくのは徐々にで良いと思う。難しい内容でも食らいついていくだけの興味を、学生に持たせることから始めないと「全学」に対して開講している意味がない。このようなことを特に感じたのは、やはり理系の内容を扱う講座に関してである。「全学向き」とシラバスには書いてあっても、かなりの数学の知識を前提としている講座がいくつかあったよう思う。

結局自分の興味のあるものばかり取ってしまったけれど、就職のことも考えて、私自身興味はなくとも役に立つ授業も取っておけば良かったなと少し後悔しています。

さほど専門的ではないまでも、広い分野（自分が専攻しようと考えている以外の分野）についての知識を身に付けることはかなりよいことだと感じた。

講義の質が教員の授業のうまさによって左右されている。どんなに興味深そうな内容をやっている、教員がダメだったらちっとも面白くない。全体的に講義の質が低いと思う。研究が本職であるとはいえ、仮にも教える立場に立っているのだから、もっと授業を工夫したり、壇上で話し方を考えたりしてほしい。学生に、その研究分野の面白さを伝える気がないのなら講義などしなくていい。

3. 教育学部（提出者数 5）

周りに流されて、もしくは自分が深く考えていないために、特に興味がわからない授業を選択し、ただ黙々とこなしていたような気がする。成績をつける際の基準を生徒側に伝えてほしいです。（特に大人数の授業が多いのですが、）勉強したのにもかかわらず不可になると、やる気が削がれます。

興味のない分野（法律、経済など）も勉強してみれば良かったと思います。今後機会があれば受講したいです。

教えてくださる先生方は素晴らしい知識を持っていたり、すごい研究をしておられるのですが、ただ、授業を聞くだけでは、己の"身"にはならないと感じました。たくさん本を読んだり、自主的な勉強が不可欠ですね。

1回生のうちに専門の授業をもう少したくさん取れるようにしてほしい。

私がとった科目は、ほぼ全てが自分の興味のある分野のものであった。教育学や心理学系の授業を沢山取り、B群科目は単位のため取りました。そのためはじめからB群科目はやる気がなく、さぼることもありました。特に前期はその傾向が強く、偏った勉強をしていたと思います。今考えると、B群科目もそれぞれ興味深い内容のことをやっていて、真剣に講義を受ければ、その良さがわかったかもしれません。その点について後悔しています。

「新入生アンケート」を読み返してみて、入学したばかりの頃は、向上心でいっぱいだったのだなと思いました。現在も、勿論向上心はあるつもりですが、当時ほどではなくなっていることに気づかされました。もう一度初心に戻って頑張りたいです。全学共通教育への意見ですが、科目によっては、毎回沢山の受講者が集まり、座る場所が足りないということがあります。受講制限をするなどして、全員がいすに座って受けられるようにしたいと思います。

4. 法学部（提出者数 14）

期待も大きく上回る興味深さを感じた科目もあれば、見事に裏切られたものもある。シラバスや友人、先輩から得られる情報には相当な制限があり、また、正誤もまちまちな傾向が強い。共通教育を司る職員のみなさんは、科目の教育内容を極力正確に学生に伝達することを試みているようだが、要は自ら受講してみないことには面白さを実感出来ないことが明白であるのだから、ある程度の限界が絶対存在することを受講者の立場から進言しておきたい。

法学部は1回生で単位をそろえないとまずいと言われたためゆとりがなかった。

点の付け方がちゃんとなっているのか不安だ。

勉強は楽しいものばかりではないのは当然であるが、全学共通科目は「聞いて楽しくためになる」授業であってほしいと思う。専門外の勉強をする機会は今後減るだろうから、この1年間に出来るだけいろいろな知識をかじってみたかったが、それが苦痛の記憶だけに終わるとしたらなんと勿体ない。講義が魅力的ならば、単位取得「だけ」に奮走する学生も減るはずである。

どの科目も半期では短すぎると感じた。

教養は簡単にはつかないと思った。興味のわく講義は少なかった。

高校までに接する機会のなかった分野の学問を学ぶことが出来たのは良かったと思う。さまざまな教養科目には接することが出来、なかなか面白かった。特に入学時に考えて取った語学（ロシア語）は、奥が深く難しかったけれど、1年間でとても親しみの持てる言語として感じる事が出来ている。どこの大学でも学ぶことが出来る言語ではないと思うし、取って1年間じっくり学ぶことが出来たのは、貴重な体験だったのではないかと思う。ただ、当面の問題は、今年もう1年間勉強しなくてはならないことだ。

昨年度1年間は、大学の講義というものを始めて聞き、戸惑うことも多かったが、結果としてはそれなりに目標を達成できた1年間であったと思う。つまり、専門の法律科目にとらわれず、経営学や教育学、科学、語学など広い分野で学問に触れることができたということである。私は自分の関心のある科目、相性の良い教員を選んで履修していたので、比較的楽しみながら学ぶことができた。一時は早く専門分野を学びたいと思ったが、今となっては、今後の専門分野を伸ばすためにも意義ある全学共通科目であったと感じる。

さまざまな授業を受けることが出来、知識が深まったと共に視野を広げることが出来たと思う。本当にいい勉強になった。

結局は専門ではないからと思って、その場しのぎな勉強をしてしまった。
(大学の授業というのは概してそうであろうが) 全く実用的ではない。雑学ではあるが、楽しめる要素が大きい。文系向けの理系科目をもっと増やしてほしい。薬学とか。

- ・ 俗に言う ” 楽勝科目 ” は全面的に撤廃すべきである。
- ・ まともな授業を受けている者が馬鹿を見るような講義は開講する必要なし。 出席重視にもかかわらず代返行為及び出席確認時のみ居合わせて授業には参加しない行為を黙認するような講義は、少なくとも評価方法を改めるべき。
- ・ 「レポート課題提出」にしても、何処ぞのHPからの copy & paste および他人のレポートを転写したもので、済ませたレポートに単位を与えているようでは考えない大学生を増やすだけである。
- ・ 繰り返しになるが、” 楽勝科目 ” の扱いについてはくれぐれも検討願いたい。
- ・ テストは簡単、授業は高度なのがよいのでは。
- ・ 教養は広くとるのが好ましいだろうが、授業へのモチベーションからどうしても一部に偏ってしまう。
- ・ 一部の講義は本当に面白かった。その講義が今後も続くことを期待する。

それぞれの講義を担当される教員方が、それぞれに自分の研究する学問に関して熱意や愛着を持っておられた。それに影響され、かなり短い間であったが、授業に関連するさまざまな本を読み、物の見方がかなり広がったと思う。全学共通科目は、自分で自由に受講する科目を選ぶことが出来る。そのためどの講義に対しても興味を持って、意欲的に受講することができた。自分にとって有意義なものであった。

5. 経済学部 (提出者数 10)

殆どの授業は「単位」のための授業だった。特にB群は、ただ興味深い授業は、自ら積極的に参加したつもりである。

面白かった授業はもちろんいろいろありましたが、やはりその一方で授業を受けても、何か勉強になったなあ実感出来ないものも多々ありました。でも全体的に見ると、受講出来る科目はかなり充実していると思います。改善してもらいたい点は、レポートさえ出せば、最後の試験さえ受ければ、単位が取れるような、学校へ行かなくてもいいような科目を減らして、生徒の積極性を引き出せるような、インターアクティブな授業を展開してもらいたいと思います。

特定の専門分野に納まらない、幅広い知識が得られて良かった。楽しい授業も多数あった。

授業がダラダラで、あんまり自分が参加していなかったような気がする。内容がそれほど面白くないせいか、自分がなまけているせいか微妙だ。もっと頑張るべきだっていつも思っている朝はなかなか起きられない。悲しいです。今年こそ頑張ります。

専門科目を勉強するための準備となる教科や自分の興味のある教科を選択したのでとても有意義であった。

変化として、一年目と二年目で選ぶ好みが変わっていることに気づく。また新1年生とあうと全く違う生き物であることに驚く。共通科目によって少なからず肥やしを

得ているのではないかと思ひ当たる。自分としては必ず出席して、せこせこやったので大変だったが、自分の成長の一助となったのではないだろうか。いかんせん退屈とマンネリ、怠惰と苦痛、受動性は否定出来なかった。今年は吟味して選べるであろう。なぜなら好みに輪郭が与えられたからだ。

自分の興味のある分野に関しては、それなりの知見が得られ充実感を感じた。一方であまり興味はないが、単位を揃えるために取らなくてはならない授業においては完全に受け身になってしまった。語学の授業は特に冗長に感じた。英語は高校の授業の延長のようで、聞いていて何かが得られる訳でもない。一方の初修外国語は教員の一方通行の授業であり、受講者の大半が眠っていた。結果的に語学力がついたのかと言われたら間違いなく「否」である。クラス選択権のない1回生は悲惨だと思う。京大における外国語教育の改善は急務ではないだろうか。

前期は全く面白い学問に出会えなかった。というか私自身講義に対して積極性がなかった。夏季休暇を挟んで気分新たに望んだ後期では多少楽しみ興味深い科目があった。2回生になった今も学びたい分野が少しある。

私は他の大学に在籍していたことがある者です。その大学では受講できる科目が少なく、選択の可能性が少なく、その点では不満だった。京大では受講できる科目が多く、その点では満足している。しかし、1年経った今考えてみると、どちらが自分のためになったかは、前にいた大学の全学共通科目である。

いろいろな科目を見てみたが、どれも今ひとつ興味をひかれるものがなかった。シラバスを見て面白そうに思っても、実際に講義に出席してみると、教員がひたすら「

」について語っているだけであった授業が多くあり、全くもって興味がわかず残念だった。

6. 理学部（提出者数 8）

今は静かになったのだが、工事中のときはずっとうるさかった。とりあえずそのこと以外は思っていたとおりだった。A群なんかいらぬという理学部生は多いが、そんなことはないと思う。むしろA群を無くせばますますオタクが増えて行くことになるだろう。そんな世の中は危険なのではないだろうか。

・教員について

満足している。もともと期待が薄かったという理由もあるが、そうでなくても一部の授業にはさまざまなことを考えさせられ、自分を培うのに一役買っていると信ずる。教員の10人に8人は学生に教える気があまりないが、2人は非常に面白い授業を披露してくれる。いわゆるA群にそのような講義が多い。学生を一人前の大人と認めている教員ほど講義は面白い。逆に、学生をバカにしている教員は講義も面白くない。教える熱意と教える内容の質が比例するからであろう。

・学生について

講義には講義に聞きたい学生しか来ぬというのも非常に喜ばしい。他の大学の先生方の話を聞くと、学生が講義中に喋る、飲食するというのは日常のことらしい。うちの大学では、そのような学生はそもそも講義に来ぬので（出席点がないので）と

でも良い。法人化されてもこのシステムは廃止すべきではない。その証拠に、唯一出席を取る語学では京大の学生も私語が多く、好ましくない状況となっている。

・京大に期待したこと

京大では、当初から「さまざまな人に会えること」を期待しており、それは十分に満たされている。とても良い友人や先輩に出会えた。ただ、もっと教員との交流も深めたいと思っている。自分から積極的に研究室などを訪問したらよいとよく言われる（ほとんどの先生は歓迎してくれるらしいのだが、）。しかし、先生のお仕事の邪魔にならないか、もしくはその先生があまり学生の世話をするのが好きでない人だったらどうしようか、という不安が常につきまとう。もし出来れば“この先生はどの時間帯ならば訪問してもよい”“このアドレスは学内の者のアポ専用アドレスです”というような学生と教員をつなぐシステムがあるとなお良いと思われた。

多様な学問を学べて良かったと思う。

大まか自分にとってやりたいことは、その分野には進みつつあるが、その分野への厚い壁を感じた年であった。体調が万全であるということが殆どなかったため、この1年は悶々とした1年だったかもしれない。唐突なようであるが、全学共通科目の試験の採点は甘すぎるのではと正直思った。この甘さがないと、私も相当な数落ちたわけだと思うが。各学部によって事情が違うが、やはりそれなりの緊張感がないと、張りが出なくなることもある。

大学にはいろんな教授がいて、さまざまなことを研究し、授業をしていることを知った。広い視野を持って考えることができるようになった反面、益々将来自分は何をすべきかわからなくなった。全く自分が悪いのだが、最初はやる気をもっていても関わらず1年を通して怠けてしまって結局何を身に付けたかがわからない。

A群：内容が増え、細分化され、いろいろ学べてよいと思った。

B群：高校より難しくなったと感じた。

全体に難しくなったと感じた。

意見としては、

クラス指定を増やしすぎて自由選択科目をとりにくくならないようにすること。

微積や物基などメジャーな科目は1コマでもAを前期、Bを後期にすること。

A群の必要単位及び卒業認定単位を増やすこと。(理系の学部)同じように文系の学部のB群もすること。

授業が多いので、はじめの1~2回をイントロ程度で終えること。

違う教員による同じ授業は、違う時間にすること。

立つ人が出ない教室を選ぶこと。

クラス指定外の授業も受けてもよいことにするなど。

生徒に取って、不便と思われることは、少しでも改善してほしい。なお、掲示情報はインターネットにも載せてほしい。また語学は学部によって異なる教育が必要であろう。

科目について

・文系、理系を問わず、非常に多くの科目が用意されていて、おもしろそうなものがあつたので、その点はよかった。

- ・理系科目は文系用、理系用があったのに対し、文系科目はそれがなかったのが残念。理系の学生にとって、文系の知識はある程度は必要だが、それ以上の専門的な知識は必要でないので、文系学部も理系用のものを作った方がいいと思う。
- ・外国語科目は、ドイツ語やフランス語などのいわゆる「第二外国語」は、どのクラスも基本的な文法や会話の授業だったので、これをクラス指定にするのは人数調整のためには仕方がないことだと思う。しかし、英語は各クラスで内容に差があるので、これをクラス指定にするのは無理があると思う。

授業について

- ・教室の収容人数を大きく超えた人数が履修登録している科目があったので、そういう科目は人数制限して、出席者が全員座って授業を受けることが出来るようにしてほしい。
- ・授業中に会話をしたり、頻繁に教室を出入りしている人が少数いた。こういう人は他のまじめな人の邪魔になるので、あまりにもひどい場合は警告をしたり、退室させてもよいと思う。
- ・A群で取りたい授業がクラス指定で埋められてしまい、取れなかったことが悔しかった。
- ・理系の学生のA群に対するやる気のなさに驚く。「単位が楽に取れそうなA群で時間割を埋めて、授業には全く出ず、試験だけ受けて通れば儲け物」といった風潮がある気がしてならない。
- ・授業に対して熱心で、わかりやすい授業を心がけている教員もいれば、自己満足に終わっている教員もいた。僕が受けた授業の中では、前者、後者ともに半々といったところだった。
- ・C群の授業4コマ中3コマが外国人教員だったのには参った。他のクラスを見ると全員日本人だったり、外国人教員はいても1人か2人のはず。もう少し平等に配分してほしい。
- ・C群ではもっと「使える語学」を教えてほしい。

7. 医学部（提出者数 2）

学生の間で単位の取りやすい科目を選択しようとする傾向があるが、私はシラバスを読んで関心を持った科目を選択しようとした。その結果、中には期待を裏切った講座もあったが、概ね私の知的好奇心を満たすに到ったと思われる。今年度のシラバスを拝見したところ、昨年度に比べて講座の種類が増加しているように見えるので、それは喜ばしいことである。外国語科目について言えば、英語の授業はあまり期待に沿うものではなかった。というのも高校の時にやっていた授業と大してかわらないからである。私としてはスピーキングの力を伸ばすような講座、E-mail や英語の書き方を盛り込んだビジネス英語講座などを期待している。

提供されている科目の種類が極端に偏っている。芸術系の科目が殆どないことに失望した。例えば音楽であれば、西洋音楽史の講義、ある1時代（バロック、古典派、ロマン派など）に関する講義、楽器に関する講義、あるいは音楽理論（和声法、対位

法など)の初歩の講義が必要だと思う。全体的に見ると、A群科目が嘆かわしいほど充実していない。

8. 薬学部 (提出者数 1)

教員によって授業に対する熱意に差があったように感じられた。A群はそうでもないが、B群はわりと適当にやる教員がいる気がします。

シラバスと授業内容は微妙に違っている。1回目から授業を始める教員が多いので、2回目以降に違う授業を取りたいと思っても難しくなるようなケースがある。きちんと出ていれば、単位はわりと楽に取れる。

時間にルーズな教員が多い。毎回20分ぐらい遅刻してくるのもあるので、せめて開始10分後には出席を取終わって、講義が始められるという状態であってほしい。

9. 工学部

1) 地球工学科 (提出者数 6)

教員によって授業にかなり差があった。熱心な教員の授業はわかりやすく興味深いものが多かったが、適当な教員のものは全くおもしろみがなく、授業を受けていても退屈で寝てしまうようなものであった。ただひたすら板書しているだけで、説明も少ししかない教員には正直腹が立った。もう少し教員に指導して、生徒の理解度がメインになるような授業をしてほしい。(特にB群)授業進度をメインにする教員が多いと思う。

前期は控えめにとり、後期はガバッと取ることになった。案の定、後期は何個か落とした。全体的な印象として、単位認定に理不尽さを感じた。理不尽に落とされたり、理不尽に受かったりということもあった。1年間を通してあまり勉強したという実感はない。

いろいろなことを学べて教養を深めることができよかったと思う。

B群(数学、物理など)は高校延長というイメージが強かった。必要な科目で基礎的なことをやらされているというイメージだ。ただ内容は高度になっているし、興味が魅かれる部分も多々あった。A群は自分の興味のあるものを取り、教養を広げようと思って取ってみるとやはりなかなか面白かった。自分の将来の学問分野にあまり関係ないと思われるものも取ったが、いろいろなことを知るという意味で有効であったと思える。A群は勿論のことB、C群もさまざまな教員、それぞれの特徴があり、たくさんの人に学べるというのは、いろいろな考え方を取り入れることができよかった。

学部の制限が無ければもっと多くのさまざまな授業を受けられたと思う。(B群)

「1回生のうちに必要なA群の単位は取ってしまおう。」という周りの空気に押され、空いているコマは、A群で埋めるようにした。その中には興味がないのに履修してしまった科目もあり、そのような科目の評価はそれほど高くなかった。それは多分「学びたい。」という意欲でなく、「単位を取らねば」という義務感から授業を聞いていたためだと思う。1回生のときに無理矢理授業を入れるので

はなく、自分が本当に面白そうだと感じるができるものだけ選べばよかったと少々後悔している。

B群科目は、教員が教え方に工夫しているほどわかりやすかった。

「授業に出ないで、単位を取るのがベスト」という考え方が横行しているが、京大にはたくさんのすばらしい先生がいらっしゃるのだから、その教えに触れることは、とてもすばらしい贅沢なことだと私は思う。

特に興味深かった授業の後には、「私は90分前より賢くなっているなあ。」と感
じることができました。

2) 理工学科 (提出者数 14)

自分はやはり工学の勉強をしに来たのだから、共通科目などたいした意味を持たないという意識が大なり小なりあったのは事実である。しかしさまざまな講義を選択して、1年間学んできて今まで(高校まで)で全く触れることもなかった分野に触れることが出来、専門とはまた異なった非常に有意義な1年だったといえる。しかし、自分の中で印象の強い講義、弱い講義に分かれ、面白い講義、面白くない講義にも分かれた。その結果出席をしなくなったものもいくつかあった。もちろん個人の興味によってどの講義を面白いと感じるかは異なると思うが、それを加味しても面白くない質的に不十分な講義があった。教員の質をもう少し考えてもらいたい。不満に思ったのは休講の多さ、講義を楽しみに来る生徒をなんだと思っているのか?非常に教員の意識に疑問に思った。

現実を知れば知るほど将来に恐れをなすようになりました。これまで漠然としすぎていたのかもしれませんが、あまりにも残酷な現実です。航空系の進路をいくというわけで、英語と専門技術を養っています。特にTOEIC800は、ISUなどでも必須だということで、今できることをきっちりやっています。いつになれば将来がはっきり見えて来るかわかりませんが、日々焦り、不安を感じながら生活できたと思います。不安をちょっとでも取り除けるよう頑張ります。

- ・科目について、「2回生以上」などという制限は不要。あくまで目安にするべき。
- ・外国語は1回生から3回生まで常に週2コマは受けなくてはならないようにするべき。

もう少し勉強しよう。

最初のイメージと少し違ったところがあった。それは、全学共通科目はもっと一般的、社会的知識を教えてくれる授業とっていたが、一年を終えて振り返ってみると、高校までの授業とそれほど変わりのあるものではなかったように思われる点である。それは少なくとも私の選択した教科がたまたまそうであったかもしれないが、A群はともかくB群の半数程度は全学共通科目といえるほど一般教養的なものではないようではずすべきかと思われる。

曜日、時限によって、例えばA群がごく少数しか開講されていなくて選択肢が少ないのには困った。講義内容はどれも充実していて満足だった。しかし理系の自分としては、A群科目は習う必要がないように思われる。先に講義は充実していると書いた

が、本を読めば得られる知識であるように思われるし、自分が興味のある学問を追究したくて大学に来たのに、卒業単位を満たすためだけに他の学問を習うのは苦痛としか感じられない人もいるだろう。誠にゴ無礼ながら進言いたしました。

クラス指定だらけで、とても自由に学べるとは言い難いと思った。A群は自由だったが残りはガチガチに固められていた。

入学当初は数学、物理学の基礎をしっかりと身に付けるとともに幅広い教養を身に付け、外国語の習得に力を入れようと思っていた。

)人文、社会科学基礎の教養、、、、、達成率50パーセント

人間の生に対する根本的な思想に対して考えを深めることが出来た科目もあった。歴史の科目は退屈なものが多く、「その時歴史が動いた」などのTV番組を見る方が、考えるところが多くて有意義な気がした。

)自然科学の基礎は基本的に自分で進んで勉強することが大事だったが、講義も充実したものが多かった。

)週2回の英語の授業は中途半端で、また自分自身で勉強していく余裕も無かったため、殆ど身に付かなかったと思う。

いろいろ感じましたね。干渉されない大学の勉強は、自分自身のやる気と根気が重要！根気強ければ、その分しっかり勉強が出来る。弱ければ何も出来ないだけではなく、精神的にも崩れちゃうかもしれない。よけいにイベントに誘惑されると自分の時間が無くなる。しかし、専門とはあまり関係ない授業も取れることは幸せだ。楽勝ばかりではなく、好きな授業なら取ればいい。一年経って楽勝ばかり取る友達より、たくさんのことを考えるようになったので、うれしい。時々成績が努力とあまり合わないような気がする。まあいいや。

A群の科目は大変興味のあるもの多くて、2回生になっても単位は関係なく受講したいなあと思うものもあります。しかしそういう授業はみんなに人気があって、教室が狭かったりすると立ち見になったり、抽選で人数が制限されたりして思うように受けられなかったものもあります。そこをもう少し改善してほしいです。

D号館の10,20,30教室は、長細くて、机が後ろにいても高くなっていないので後ろに座ってしまうと黒板が見えなくて、教員の声が聞こえなくて大変困りました。

非常に興味深い科目がたくさんあり、満足出来た。ただ一つ残念なことは、工学部はB群科目が指定されており、単位が認められないB群科目まで手が回らないため、実質的に選択の幅が制限されているということである。これでは教養教育というものも有名無実だ。そもそも工学系では数学を道具として使うのに、やたら深いところまでやっている。理容師がはさみの作り方を学んだり、ピアニストがピアノの作り方を学ぶようなものだ。そのようなことに時間を取られ、他のB群科目(生物学や地学など)を全く選択できなくなっている。これでは視野が狭く偏った人間を大量に送り出すことになってしまうのではないだろうか。

A群は自分が興味を持っている科目を選んだので面白かった。B群(クラス指定)は教員によって教え方が違うのが気になった。せめて教科書、参考書は統一すべきだ

と思う。教室指定方法には疑問が残った。クラスの人数よりも定員が少ない教室を充てる必要はないと思う。どうしてもというならパイプ椅子ぐらい用意すべきだと思う。

あんまり面白くなかった。

思ったより簡単に単位が取れる。特にA群では授業に出席しなくても、レポートを書けばとおるものもあり、軽視されがち。それよりもっと厳しくして、必要単位数を少し減らした方が習熟度はかなり上がると思う。ほとんどの京大生は自分の興味のある科目なら自主的に勉強すると思われる。あと毎回立ち見がでるほどの人気科目は、教室変更を積極的にしてほしい。

3) 電気電子工学科 (提出者数 4)

1年間全学共通科目を受講したらいい印象もあるし、悪い印象もある。特に英語のクラスは何も勉強しなかった。

英語の授業は効果がよくないと思います。

微積や線形代数は難しかったが、興味深かった。

A群ぐらいしか選択の自由が無かった。

英語をもっとしっかり勉強できればよかった。

大変バラエティに富む講義を聞いたためか、感想を一言で表現するのは難しいです。私は所属が工学部ということもあり、ややもすると無理矢理受講させられる科目であるという仲間内の言葉を信じてしまいそうな環境にあるわけですが、その実、こちらが興味を持った科目について自分なりの問題意識を持ちつつ聴講してみると、一つ一つの講義の面白さがわかってくるものばかりでした。まず、A群は、その幅の広さと、講師、教員の方の専門について語っていただけるといった恵まれた環境が大変意義深いものがあつた。本当に楽しみなものから、専門性の高い内容についてのイントロダクションのようなもの、他学部に解放された専門科目まで、各期の履修のため取得選択するのが大変難しかった。概論形式のリレー講義もよいと思う。その分野についてさまざまなアプローチをしている人のお話を聞けるのは有用だと思う。履修登録について言いたいのは、せめて始めの2回ぐらいは選択期間として、イントロをやってほしい。2つ以上に重なった時は、授業の雰囲気を知りたくても難しい現状がある。次にB群は、工学部ということもあって、受けても無駄になる講義が多く、せっかくの機会を逃した気がしてしまう。C群については、英、独ともにわかりやすかったと思う。

大学の教養科目の良さがわかってきたところで、専門科目ばかりのカリキュラムに入ってしまうのは惜しいのですが、単位認定されなくても、今年もA群取ります。大変楽しみにしていますので、全学共通科目の更なる充実をお願いします。乱文申し訳ありませんが、これが正直な感想です。

4) 情報学科 (提出者数 4)

きちんと出席して勉強した科目を落とされたのは非常に悲しかった。

A・C群は無駄な科目が多すぎる。淘汰すべきだ。しかし、ためになる科目、興味深い科目も多い。全体的によかったと思う。

講義を聞いて学ぶだけでなく、自主的な勉強も必要だと感じた。

けっこう幅広い分野があって、面白く役に立つ講義がたくさんあった。ただ、たまに何を言っているのか聞こえなかったり、黒板の字が小さくて見えなかったりというのもあった。

ポケット・ゼミを後期も開講してほしかった。

5) 工業化学科 (提出者数 7)

最悪やった。京大が看板にしている「授業における会話性」が見事になかった。あった人は「教授と黒板の会話」だけや。内容が高校とくらべものにならんぐらいムズいのは当たり前やけれど、それやからこそ学生の理解度を確かめながら進めるべきや。教授に頼るのは甘い考え方もしれんけど、研究者である一方教育者でもあんねんから、学生ほったらかして給料だけもらてたらあかん。

学問では人の器を大きくしたりするという事は100%の達成を見ない。しかし、どんな状況把握もその分野の学問を知っていればさまざまになってくる。ここに面白さを感じ、自分も幅のきく人間を目指すという意味で、パンキョーに取り組んだ。A群ではさまざまな分野に手をつけ、B群では深く思考していき、C群で異文化、D群を自分のためにと、本当に1回生の間これらをフルに活用させてもらった。中には面白く無くなってしまったりしたものもあったが、それも自分を知ったという意味ではよい経験であった。受講をしっかりと行い、単位を取るということでは、しんどいこと限りなしではあったが、その忙しさもある種楽しさであった。必要な単位は揃うし、これからは専門で忙しくなるであろうから取らなくなるのであろうが、興味があったらまた一つ取ってみたいと思う。この科目は自分探しというのには持ってこいなのかもかもしれません。

この1年を通じて、全学共通科目の授業内容、方針にはさまざまな問題点、改善点があると実感したが、その中でもなかならず改善の余地があるのは語学である。私が主張したい点は大きく分けて二つある。第一に京都大学における英語教育について言及したい。率直に言って、大学における英語教育は選択制にすべきである。日本語による論理的な会話能力が欠如した若者が増加する現在、全ての大学において英語教育を強制的に実施する意味は薄れてきているといえる。大学における英語教育は選択制にすべきだと前述したが、これは大学入試についても当てはまる。近頃世間は小学校からの英語教育に傾斜しているが、こんなことは言語道断だと思う。世間の親御さんが小学校からの英語教育実施を強く要望する背景には、日本が国際社会の一員として不可欠という現状が垣間見えるが、日本のほとんどの大学が、大学入試の際に英語を必須科目として課している現状も看過できない。すなわち私は大学入試で英語を課すことが遠因となり、小学校からの英語教育への傾斜が強まっていると考える。第二に、1回生のときに第二外国語を必修科目として学習させるのは百害あって一利なしと言えよう。そもそも日本語もままならない学生に英語を課し、その上第二外国語として、仏語、独語、伊語、中国語、露語、アラビア語などのうちから一つを課するのは本末転倒である。いかに本末転倒であるかは、不肖私が所属する工学部工業化学科の

第二外国語履修状況を見てもらえば明白である。工業化学科では、1回生のときに、第二外国語を4単位(通年)取得すれば、2回生からは学習する必要がなくなるのだが、逆に2回生終了段階で、第二外国語の単位を4単位取得できていないと、3回生に進級することはできないのである。そこで私も含めて工業化学科の学生諸君は、授業開始当初は、単位取得のため、必死で勉強しようとするのだが、時間が経つにつれて、心の中で「どうせ単位のための勉強。60点以上取ればいいんだ。」という意識が働き、学習意欲が削がれてしまうのである。3回生に進級するためには、間違っても落とせない。第二外国語であると同時に、実質的には「単位取得のための勉強」と化し、形骸化してしまった第二外国語。そうしたジレンマに陥り、苦悶する学生が増加の一途をたどり、その結果カンニングという一見道徳に反した行動ではあるが、実質はいき場のない学習の自衛的行為に発展するのである。このように第二外国語教育の必修は悪循環しか生まないのであり、前述のように有害無益なのである。私は、京都大学が英語も含めた外国語教育を見つめ直し、学生本位の教育となるよう改善し、全国の国公立大学の草分けとなるよう切望する。

特にB群科目が難しく、もっと勉強して講義についていかなければと思った。

1年間全学共通科目を受講したが、やはり同じ科目であっても、先生によって違う内容を教えている。一応専門科目の勉強の準備であるが、やはりかなり難しい授業であった。2回生から授業がそんなに多くないから、もっと楽しく学校で勉強できると思う。

全学共通科目は、本当にいろいろな分野の講義があり、選ぶ楽しみというものがありました。理系の人でも文系科目を受けられるので、学部や学科などの邪魔な壁がなく、多方面に知的欲求を満たすことができました。その点はよかったです。次に悪い点を挙げるとすると、先ず教員によって差がありすぎる。シラバスに書いてある内容に興味を持ち、期待して行ってみたら、教員がパツとせず、がっかりしたことがありました。個人の好みもあるので、教員の良し悪しはいちがいには言えないかもしれませんが、声の小さい人、声のトーンがあまりに低く暗い人、発音がはっきりせず何を言っているのかわかりにくい人、話すスピードが遅すぎる人など、客観的に見ても改善すべき点がある教員はけっこういると思います。講義のメインは「話術」なので。またこれも仕方のないことかもしれませんが、本当に行きたい講義が他の専門科目と重なって行くことができなかつたことや、1コマの枠の中で取りたい全学共通科目が2つあってどちらかを泣く泣く捨てることになったことがあり、とても残念でした。あとスポーツ実習を1限目にもってくるのはどうかと思いました。特に後期の(12月以降の)朝は寒いので。

語学(特に英語)の難しさ、楽しさに差がありすぎる。数学も教員によって大幅な差がある。クラス指定で授業を行うならもっと質の高い授業をすべきである。2回生にあがったとき「ついていけない」という状況が実際起きている。

10. 農学部

1) 資源生物科学科 (提出者数 3)

1年前、全学共通科目のシラバスを見て、あまりにもたくさんの講義があるのでびっくりしました。私は特にA群は自分の興味のある講義を受講したのでとても面白かったです。専門的な勉強はこれからいくらでもできますが、専門外のことは、1,2回生の間ぐらいしかなかなか学べないので、今年もいくつか受講しています。幅広いものを見方を得るためにも全学共通科目はとても重要だと思います。法人化によって全学共通科目が減らされることのないよう祈っています。

3,4回生で必要になる専門知識の基礎は身に付けられたと思う。さまざまな分野の授業があり、自分にあったものを選べるのがすごく便利だった。ただ、休み時間15分で、北部まで移動しなければならない時に限って、授業時間を超過する教員に当たったことは閉口した。

教職に関する情報が、全学共通、学部、教育学部とバラバラに掲載されていてわかりにくいです。まとめて頂ければ大変うれしいです。

2) 応用生命科学科 (提出者数 2)

1年間、さまざまな分野のことを学び、外国語など新しいことに触れ、知識を身につけられたと思う。

教授によって同じ名前の授業でも、内容、難易度が異なっている。クラス指定など自分で選べない科目がクラスによって教授が違い単位の取りやすさ等がかかって来るのは不公平だと思う。

3) 食料・環境経済学科 (提出者数 2)

他大学に通う知り合いの話を知ると、京大の一般教養は種類も量も豊富だということでした。それは非常にいいことだと思う。幅広い知識が学生の都合に合わせて身に付けられるからだ。この多様な一般教養科目が多数設置されている体制はこのまま維持されてほしい。

入学当初は、今まで習ったことのないことを勉強しようとは思っていたが、1年経って振り返ってみると結局興味のある講義や単位の比較的取得しやすいものばかりを取っていた。周りに聞いてみると、楽なものしか受けていないと言い切るものまでいた。入学時と比べて視野を広げられたのかどうか疑問に思う。結局視野を広げるかどうかは自分の心次第。気持ちが弱ければ自分や友人のようになる。それがわかってはいるが、あえて現在の講義選択の方法に対して提案する。自由に選択できるのはすばらしい。なおかつ、それぞれの学部、学科で学ぶ上で学んでおいてほしい講義を推薦し、そのうちから単位を取らなければ卒業できないというやり方は上手いと思う。しかし、そういった講義は大きいものが殆どである。手の抜きようはいくらでもある。まじめなやつに出席を頼めばそれで単位獲得なんてものもあった。意味がない。全学共通である以上大講義になるのは仕方ないかもしれない。それでも全員が参加できる。いやしなければならぬ講義を推薦科目とすべきだろうと思う。これは意志の弱い学

生を使いものにする手段となるのではないだろうか。

・受講人数を制限し、出席を取ってください。真剣に講義を受けたいと思っている人間がいます。昨年度は1回も講義に出ず、単位を取得したものがおりました。

4) 森林科学科 (提出者数 4)

学生は受け身であってはならない。我々は自ら思考し、また行動を起こさなければならぬ。書物の世界、ネットの世界、そして人間同士の世界でさまざまな出会いをし、自分よりも大きな存在に圧倒されながらも、一步一步力強く歩んでいかなければならない。抽象的すぎて何の参考にもなりませんね。一言で言うと、ゼミは刺激的なものが多かったが講義は拷問に近かった。ということです。もっと対話をしてください。

教員によって授業に対する意気込みや採点、わかりやすさがまちまちだった。ひどい教員は自分の頭にあることをただ断片的に述べるだけで、文章がつながっておらず、話を聞いても全く理解できなかった。中には丁寧に素人にもわかるように話してくれる教員もいることはいる。しかし、全体的には、講義としての質は悪いように思う。よく先輩に「大学は自分で本を読んだりして勉強する所。講義はその分野を知るきっかけにすぎない。」と言われる。それはそれで構わないと思う。十数回の講義で深くまでやるのは無理だろうし、いつまでも受動的な勉強態度では、自分自身を伸ばすことはできないだろうと思う。しかし、教える立場として限られた時間の中でいかに一つ一つの学問分野を紹介するか。いかに質の高い「きっかけ」を提供するかもっと創意工夫と熱意がほしい。高い授業料を払ってくれている親に申し訳ない。

全学共通科目を受講して感じたことは、熱心に教えてくださる教員と、そうでない教員に大きな差があるような気がした。単位認定の方法においても、5時間にも及ぶ過酷なテストもあれば、30分ぐらいでただ授業の感想を書かせるものまでさまざまである。確かに一般教養の科目なので教員の好きなように授業をすればよいのですが、かといって軽視してほしくはありません。就職や今後の研究でもしかしたら役に立つ可能性もあると思うからです。また同じ名前の科目なのに、教員によってその内容が大きく異なることも不満です。特にクラス指定である科目はそれが顕著だと思います。(僕の場合、英語がそうでした。) 今後は面白くて、内容の濃い全学共通科目に期待したいです。

どう考えても、しょうもない授業もあったが、それは自分のせいなのであって、そのままを貫き通してほしい。変えない努力をしてほしい。あ、でも設備(マイク、OHP)をきちんと先生に教えておいてください。外見頼りの設備は特にいらぬと思います。京大らしくない。

11. 学部名未記入 (提出者数 1)

教員の大半が講義の熱意を持っていない。テキストの棒読み、天下りの結論などの形をとる講義は、教員自身の学問への情熱、学力の欠如を露呈するのみならず、夢と希望を持って入学した学生の勉学意欲を削ぐことになるので、そのよう

な講義をするのであれば、教壇に立たないでください。

前期、後期ごとに学生が講義の評価をし、その結果をカリキュラムの編成に反映（評価の悪い講義は廃止、よい講義は増加するなど）して欲しい。

講義の選択の自由を最大限認めて欲しい。例えば工化の微積Aは4クラスの指定であるが、4クラスのうちのどれを受講するか選択制にしてほしい。外国語その他の科目も同様。

学部間の単位互換を認めて欲しい。例えば工化の学生が、工化の有機化学の単位を理学部化学科の有機化学で代替えできるようにして欲しい。大学間の単位互換も同様にして欲しい。



平成15年度入学者の2回生進級時

アンケート報告書

平成17年4月発行

発行 京都大学高等教育研究開発推進機構

〒606-8501 京都市左京区吉田二本松町

TEL 075-753-6513